

2020/11/21

(うとQ世話し new catch copy 要請)

「コロナ禍第3波襲来で飲食業界連鎖倒産の兆し」

先も見えず、返済の当てもない儘 owner の「気持ちの糸が切れかかっている」

との記事を見ました。

「糸が切れかかっている」

正に言いえて妙。そのものズバリです、我々の心境は。

そんな折、外国人従業員から電話が

「シャチョ、ゲンキ？」

それで毎日救われています。糸が辛うじて繋がります。

で、やおら

「corona だけ見ていると負けてまう。こんな時こそその先の new normal に気を向けにゃ」

New normal 即ち「新常态」

その内の「常態」を何と見るか？

それは正に「哲学」領域。

即ち世界をどのように見、捉え、描くかの「認識論」の範疇です。

嘗ては経済学の「神の見えざる手」や念唱の「照一隅即照千隅」で、最後の最後でえいやつと全て打ちちゃり貴方任せだったものを、今回は貴方任せをせずに最後まで細部に至る迄明確な絵姿を自力捻出す事が希求されております。

設計図は一か所でも曖昧な処があると物は動きませんから。

「物」という言葉で思い出したのですが、高校時代に哲学の特別授業で出てきた言葉に「唯心論」対「唯(物)論」という二項対立がありました。

唯心論というのは、世界は全て心象の投影であるという考え方。

唯物論は、世界は全て物質由来であるという考え方(心象とて脳という物質が作り出した物という訳です)

換言すれば

心の充足か？物質的豊かさか？

更には愛情か？経済か？

も一つおまけに、文化か？文明か？

等の二者択一を促す二項対立。

当時、このどちらの考え方を取るべきか真剣に悩んだものですが、我が国ではそういった対立概念は馴染まない様で、それをよく表していたのが「物心両面」とか「神仏混交」等の曖昧概念。全ては曖昧模糊の「和洋中華、何でもあり食堂」状態。

それはさておき、同じく特別授業に頻出した独逸哲学者ヘーゲルの定位、反定位、止揚という「弁証法」によれば、この先、上述の二項対立ではなく、さりとして何でもあり食堂でもない二項対立の上位概念、即ち止揚された「新しい認識論(観)」が出てくる事が同時代独逸

哲学の巨星カントの言葉を借りれば「それは存在するか否かは証明できぬが、必然的にそれは要請される」と。

略せば

「7割経済でも心の充足が得られる新認識論(観)の到来」

が

「見えざる神の手」や「照一隅即照千隅」等に替わる誰にでも分り、覚え易い「new catch copy」levelで強く要請されているのが

正に「今」であり喫緊の急務

とも言えましょう。